

Title	<書評>華人アイデンティティの多元的ダイナミズム
Author(s)	鍋倉, 聡
Citation	京都社会学年報 : KJS = Kyoto journal of sociology (1994), 2: 153-165
Issue Date	1994-12-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/192500">http://hdl.handle.net/2433/192500</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

## <書評>

# 華人アイデンティティの多元的ダイナミズム

Cushman, Jennifer and Wang Gungwu (eds.),  
*Changing Identities of the Southeast Asian Chinese  
 since World War II.* (Hong Kong University Press, 1988)

鍋 倉 聰

### 1. はじめに

近年、「中国」に対する関心が高まっている。しかしながら、「中国」に対する関心の高まりは、中華人民共和国や中華民国といった単なる国民国家としての中国に対する関心の高まりとしてだけではなく、東アジアや東南アジア地域全体に対する関心の高まりとあわせて、これらの地域全体と関連付ける形で捉えることが必要である。そう捉える場合、東南アジア地域と「中国」とを結び付ける鍵の一つとなるのが、華人<sup>(注1)</sup>である。

その華人とは、いったいどのような人々のことを指すのであろうか。華人とは、いったい何なのであろうか。一見素朴に見えるこの問題は、実は答えるのが非常に難しい問題である。結局、華人を定義する場合、華人自身のアイデンティティの問題に行き着き、究極的には、「華人とは、自分自身を華人とアイデンティファイし、民族的に (ethnically) 中国に起源を持つと主張する人のことである」(Tan Chee-Beng, 1988, 本書p.139)とさえ定義することができる。華人研究において、アイデンティティの問題が非常に重要な意味をもつ理由の一つが、ここにある。そこで、「中国国外の華人社会で起こっていることについて議論すると、全てのことが、自己認識に立ち戻り」(本書序文p.ix)、「第2次大戦後に成長してきた世代の華人学者の研究の共通の関心を探すならば、その焦点はいわゆる華僑の『アイデンティティ』の問題である」(廖, 1993, 原編p.27)という状況がうまれてくる<sup>(注2)</sup>。

こうした状況の下、「第二次世界大戦後の東南アジア華人のアイデンティティの変遷」と題した華人アイデンティティに焦点を当てた国際シンポジウムが、1985年にキャンベラで開催された。華人についてのシンポジウムは、さらに、1989年に廈門で、1991年にマニ

ラで、1992年にサンフランシスコで、1994年にシンガポールで開催され、こうしたシンポジウムに、先の「第2次大戦後に成長してきた世代の華人学者」をはじめとする各国の華人学者たちが集まった（廖、1993、原編p.27）。そのうち、キャンベラシンポジウムは、1985年6月14日から16日にかけて、オーストラリア国立大学において、三年間のプロジェクトの仕上げとして、オーストラリア・北米・東南アジアなどから40人の研究者を集めて開かれたが、そのシンポジウムをもとにして参加者が寄稿したシンポジウムと同名の論文集が刊行されている。それが、本書『第二次世界大戦後の東南アジア華人のアイデンティティの変遷』である。

本書は、14本の論文と、17本の抄録とから成り立っており、総論と四つのセクションとに分けられている。四つのセクションは、文化面・政治面・経済面・社会組織面と、華人のアイデンティティの強調点の違いによって分けられているが、内容は互いに重複していて厳密に分けられているわけではない。東南アジア全体についての総論2本を別にして、それ以外の12本の論文を国別に見ると、マレーシアとインドネシアについて各3本、フィリピンが2本、シンガポールが1本、2ヶ国以上についてが3本（シンガポールとマレーシア、インドネシアとタイ、カナダとフィリピンとシンガポール）となっていて、マレーシアとインドネシアについて触れているのが各4本、フィリピンとシンガポールについて触れているのが各3本と、シンポジウム参加者の研究事情を反映して、これら4ヶ国に関心が集中している。それ以外の国については、主に抄録でフォローされているにすぎない。論文の執筆者には、本書の編者であるWang Gungwuをはじめ、Tan Chee-Beng、Chinben See、Leo Suryadinataといった代表的な華人研究者が含まれている。

このように、本書は、華人のアイデンティティという共通のテーマの下に様々な論文が集められているのだが、一つのシンポジウムにおける議論を経た結果生まれたものであって、各論文が互いに無関係に別個に存在しているのではない。各論文に共通した意図について、序論では、二つの点があげられている。すなわち、一つは、多元的にアイデンティティを捉えようとしている点である。もう一つは、「アイデンティティは個人の過去に堅く根差しているという信念」に基づいて、「歴史的な時間的枠組の中に議論を位置付け、分析に深みを与えようとしている」点である（本書序文p.x）。

本書の各論文に共通した意図については、序論だけでなく、その次のWang Gungwuの総論においても、述べられている。Wangは、このシンポジウムを取りまとめ、本書の編者を務めた中心人物であり、その総論は、本書の基調をなすものとして記述されているといえよう。

本稿では、まず、Wangの総論である‘The Study of Chinese Identities in Southeast Asia’（本書p.1～21）を紹介し、次に、各論として、フィリピンについての論文3本、マレーシアについての論文2本を取り上げ、最後に、本書の意義及び問題点について考察していくことにする。

## 2. 内容紹介

### 2.1 総論

論文の冒頭で、Wangは、華人のアイデンティティが多動的なものであることを強調する。そして、第二次大戦後に研究者によって論じられてきた華人のアイデンティティを、大きく七つにまとめる。すなわち、「歴史的アイデンティティ」「中国ナショナリスト（Chinese nationalist）・アイデンティティ」「コミューナル（communal）・アイデンティティ」「現地国民（local national）アイデンティティ」「文化的アイデンティティ」「エスニック・アイデンティティ」「階級的アイデンティティ」である。こうした七つのアイデンティティ及びその相互関係を、時間軸にしたがって、Wangは、次のように関連づけている。

「歴史的アイデンティティ」は、過去の中国的価値観から導きだされたもので、第二次大戦前の華人に多く見られた。しかし、中国本国でナショナリズムの動きが活発になると、1920年代から1930年代にかけて、その新しいアグレッシブなナショナリズムによって、歴史的アイデンティティは攻撃されるようになり、「中国ナショナリスト・アイデンティティ」が見られるようになった。中国ナショナリスト・アイデンティティは、孫文の「民族（minzu）」という概念に基づくもので、1930年代・40年代にかけてピークを迎えたが、戦後、東南アジア諸国が独立し新興国民国家の建設が進むと、「現地国民アイデンティティ」に道を譲るようになった。但し、華人が総人口の半数近くを占めるマラヤでは、「コミューナル・アイデンティティ」が発達した。一方、現地民族を中心とした新興国民国家政府によって、華人の文化的特徴を放棄する同化（assimilation）かそれを保持する統合（integration）かを迫られた華人は、1950年代以降、独自の「文化的アイデンティティ」を発達させた。文化的アイデンティティは、国民国家は多くの文化と共存することができるという考えに立ち、新興国家への政治的な忠誠心と共存することができた。それは、非常に柔軟な概念で、先の歴史的アイデンティティを吸収し、さらに、近代的な非中国的な文化をも取り入れていったのである。しかし、政治的側面・原初的側面を意識的に無視する文化的アイデンティティには限界があり、人種やマイノリティの問題が盛んに論じられ

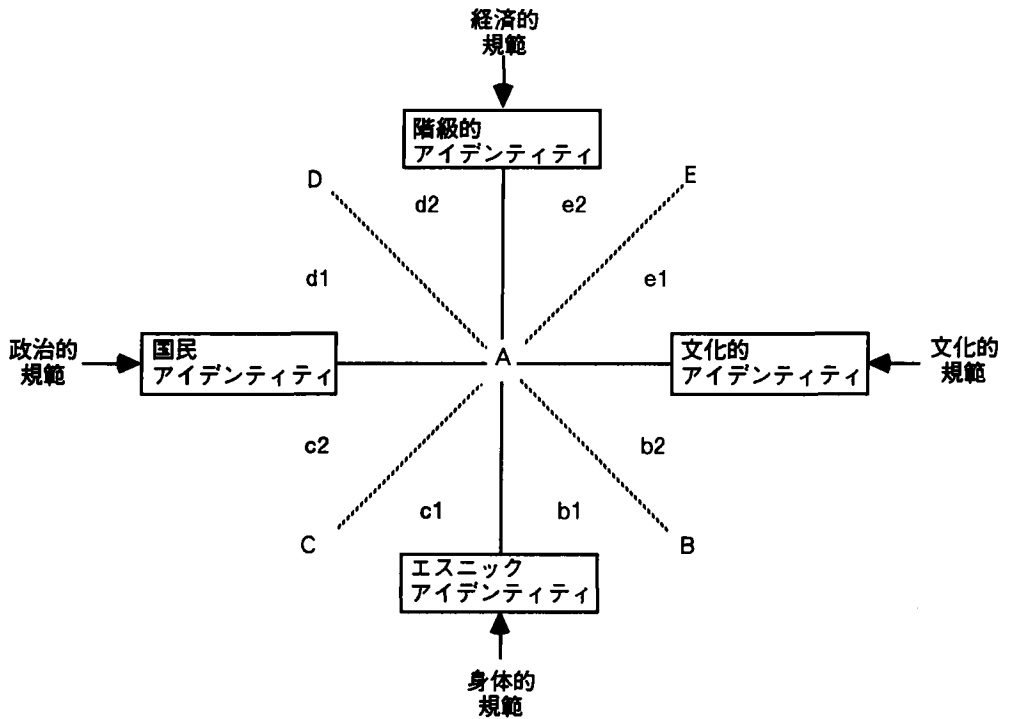
るようになった1960年代後半以降、とくにそれが明らかになった。そこで登場するのが、「エスニック・アイデンティティ」である。エスニック・アイデンティティは、原初的側面を無視せず、また、マイノリティの権利闘争と結び付くことによって、強い政治的側面をもった。その背景には、華人の現地化が進み、国内のいくつかのエスニック・マイノリティの一つとして認知され始めたことがある。マレーシア独特のコミュナル・アイデンティティは、このエスニック・アイデンティティに取って代わられた。また、NIES諸国の経済発展等を背景に、1970年代以降、「階級的アイデンティティ」が主張されるようになったが、それが民族的境界や国境を越えたものになるのか、Chineseのエスニック・アイデンティティに拘束されるのか、それ以外のものなのか、その方向性については、時期尚早として述べられていない。

このように七つのアイデンティティを互に関連づけて述べていくことによって、東南アジア華人のアイデンティティが折り重なっていく様子が示されるのである。しかしながら、こうして単にアイデンティティを列挙していただくだけでは、「各アイデンティティが分離していて、華人のアイデンティティの変遷とは、ある華人のアイデンティティから別のものへの変化を意味するような印象を与えるおそれがあり、東南アジア華人のアイデンティティの複雑な現実を伝えるのに十分ではない」（本書p.10）。

多動的なアイデンティティを獲得し維持する過程を、一つ一つ分離せずに、同時に捉える方法はないのだろうか。そこでWangが持ち出すのが、「規範（norms）」というもう一つ別の概念を組み合わせることである。規範とは、「集団のメンバーを縛って、彼らの行動を導きコントロールし規制する、観念的な基準のこと」であり、「こうした基準は、今まで用いたアイデンティティの概念の全てに存在していて、描かれた各アイデンティティは、一定のセットの規範の受容に基づくのである」（本書p.11）。

Wangは、東南アジアの華人のアイデンティティを決定する規範として、四つの規範を挙げる。すなわち、「身体的（physical）規範」「政治的規範」「経済的規範」「文化的規範」である。各規範は、それぞれ、エスニック・アイデンティティ、国民アイデンティティ、階級的アイデンティティ、文化的アイデンティティを主に規定するが、一対一に対応しているわけではない。各規範とアイデンティティとの関係は、次のように図を用いて説明されている。

図



→ 圧力の方向



一つの規範が優勢な場合の規範的アイデンティティ。また、多元的アイデンティティのコンビネーションにとって規範となるアイデンティティ、例えば、BとCに対するエスニック・アイデンティティ、CとDに対する国民アイデンティティ、DとEに対する階級的アイデンティティ、EとBに対する文化的アイデンティティ。

A 規範の圧力から等距離でそれゆえ自由な、究極的な多元的アイデンティティ。

共同した (Common) 多元的アイデンティティ

B + c1 + e1 = エスニック・アイデンティティと文化的アイデンティティ

C + d1 + b1 = 国民アイデンティティとエスニック・アイデンティティ

D + c2 + e2 = 階級的アイデンティティと国民アイデンティティ

E + d2 + b2 = 文化的アイデンティティと階級的アイデンティティ

(本書p.12)

例えば、エスニック・アイデンティティは、図のポジションCとポジションBという「主に身体的規範から影響を受け、さらに政治的規範からも文化的規範からも影響を受けるアイデンティティのコンビネーションにとって、規範となるアイデンティティである」。だから、「エスニック・アイデンティティには、文化的規範からの影響が強く、中国文化によって補強され政治的規範に対して敵意をもつものもある（図のポジションB）し、逆に、政治的規範からの影響が強く、居住国の国民としてのプライドに転換するものもある（図のポジションC）」のである。また、「仕事や職業上の関心のために民族や文化の境界を越えた経済的規範に順応する時、中国の文化的アイデンティティを強調することを通してそうする者もいる（ポジションBからポジションEへのルート）し、政治的忠誠心を強調して国家からの援助を得る者もいる（ポジションCからポジションDへのルート）のである」（本文p.15）。

直線的に変化する単一なものとして捉えられがちなアイデンティティを、Wangは、規範というもう一つ概念を用いることによって、アイデンティティと規範という二つの概念が織り成すいわば二次元的なものとして、幅をもたせて捉えようとしているのである。

しかしながら、「こうしたアプローチがフィールド研究に役立つかどうかは、実際にテストすることが必要であろう」（本書p.16）とWang自身が論文の最後で述べているように、華人アイデンティティの多元的なモデルは、実際の東南アジア華人に当てはめていかなければ意味がない。それでは、華人のアイデンティティを多元的に捉えようとする試みは、総論の後に続く四つのセクションに収められている各論において、どのようになされているのであろうか。

ここで、12本の各論全てを取り上げるのは不可能であるから、本稿では、フィリピンについての三論文とマレーシアについての二論文を取り上げることにする。本書で主に取り上げられている4ヶ国のうちフィリピンとマレーシアについての論文を取り上げるのは、この2ヶ国についての論文が、華人アイデンティティを多元的に捉えようとする試みを検証するのに最も適していると判断したためであり、また、華人の総人口に占める割合が、人口統計上フィリピンでは約2%にすぎないのに対して、マレーシアでは30%を超えるなど、両国は対称的だからである。

本書に収められているフィリピンについての三論文とは、Antonio S. Tan ‘The Changing Identity of the Philippine Chinese, 1946-1984’（本書p.177～203）、Chinben See ‘Chinese Organizations and Ethnic Identity in the Philippines’（本書p.319～334）、Edgar Wickberg ‘Chinese Organizations and Ethnicity in Southeast Asia and North America since 1945 : A

Comparative Analysis' (本書p.303~318)である。Antonio S. Tan、Chinben See、Edgar Wickbergは、フィリピンの華人社会研究に関する「最も傑出した学者」(廖、1993、原編p.29)と言われており、三論文ともにフィリピンの華人を対象にしているが、前者が居住国志向という点を強調しているのに対して、後二者は、中国志向という点を強調している。同じフィリピン華人を対象にしながら、どうして、このような違いが生じるのだろうか。

## 2.2 フィリピン華人のアイデンティティ

これら三論文の差異については、すでに廖赤陽によって言及されており、そこで次のように述べられている。「表面上は、Tanと施[See]および Wickbergの結論には若干の差異が存在しているように見えるが、実際上は、この種の差異は、研究方法・アプローチの角度および研究対象の違いから生じたものにすぎない。即ち、施と Wickbergはより多く、文化人類学と民族学の方法を用いて、血縁と地縁の関係を基礎としてつくられた華僑・華人社会を考察しているため、視線はより多くビノンド(Binondo)といったような伝統的華僑・華人地区に向けられている。それに対してTanは歴史学的方法を主としており、華僑・華人の新しい世代に着目している。」(廖、1993、原編p.30)まったくこの通りなのだが、もう少し詳しく見てみよう。

Tanは、フィリピンの華人を、フィリピンに1880年代から1930年代にかけてやってきた第一世代、フィリピンで生まれ1930年代から1950年代にかけて成年に達した第二世代、その子供たちの第三世代に分ける。第一世代が中国志向なのに対して、第二世代からフィリピン志向が強まり、第三世代になると全くのフィリピン志向である。第一世代から第三世代にかけてのこうした変化を、Tanは、具体的な数字を挙げるなどして丹念に述べているので、説得力がある。Tanによると、自分は第三世代の華人に焦点を当てているのに対して、SeeとWickbergは、第一世代や第二世代といった年輩層の華人に焦点を当てているのである。そして現在、第一世代はほとんど姿を消し、フィリピン華人の85%という圧倒的多数を、第三世代が占めている。

一方、Seeは、18世紀末以降のフィリピン華人の様々な組織を分析した結果、「フィリピン華人が中国の文化的価値観を固執してきたのが、単に感情的な理由のためではなく、予測できない将来に生存するためでもあった」(本書p.327)ということを明らかにする。そして、フィリピン華人を、中国生まれかフィリピン生まれかという二分法と、マニラ在住か地方在住かという二分法とを用いて、四つに分ける。Tanが時間軸に従ってフィリピン華人を分けているのに対して、Seeは空間軸に従っていると言えよう。そして、中国生まれでマニラ在住の華人を中国志向の中心に、フィリピン生まれで地方在住の華人を



フィリピン志向の中心に位置付ける。中国生まれで地方在住の華人と、フィリピン生まれでマニラ在住の華人とは、前者が中国を後者がフィリピンを第一に志向しているものの、共に中国とフィリピンの両方を志向している。Seeによると、Tanの分析は、フィリピン生まれで地方在住の華人の観点から行っているにすぎないのである。Seeの主張も、18世紀末以降のフィリピン華人の様々な組織を分析した結果なので、Tanに劣らぬ説得力がある。

Wickbergは、第二次世界大戦後増加したフィリピン・シンガポール・カナダの華人組織を比較分析し、東南アジアと北米とでは華人組織の置かれた状況は全く違っているのに、ともに共通した組織を発達させている点に注目する。そして、華人がばらばらになって、それ以外の者と混ざりあわない限り、同化は不可能だとして、統合を主張するのである。

Tan、See、Wickbergの研究の多様性は、そのまま、フィリピン華人の多様性を示している。三論文とも、フィリピン華人のアイデンティティの一面ではあるが、それぞれの確に捉えているのである。しかしながら、そのどれもが、あくまで華人アイデンティティの一面を一元的に捉えているにすぎず、決定的なものではない。例えば、Tanが主張するように第三世代の華人がフィリピン志向となったのは、第二次大戦勃発から1975年の中華人民共和国との国交回復まで、30年以上もの間、中国大陸からの華人の流入がとだえたことの影響が大きい。1975年以降、中国大陸から「より中国人的な (more Chinese)」人々 (本書p.199) の流入が活発になっており、その結果、フィリピン華人のアイデンティティは、今なお変化しているのである。

フィリピンは、東南アジアの他の諸国と比較して、統計上華人の数が少ない。それでは、フィリピンとは対照的に、統計上華人の数が多く全人口の30%以上を占め多民族国家を形成しているマレーシアでは、華人のアイデンティティは、どのような変遷をたどっているのだろうか。

本書でマレーシアについて触れた4本の論文のうち、ここで取り上げるのは、Tan Liok Ee 'Chinese Independent Schools in West Malaysia : Varying Responses to Changing Demands' (本書p.61~74)、Tan Chee-beng 'Nation-Building and Being Chinese in a Southeast Asian State : Malaysia' (本書p.139~164) という2本の論文である。

### 2.3 マレーシア華人のアイデンティティ

先に述べたように、マレーシアでは、総人口に占める華人の割合が30%以上と高く、華人が国内で一定の勢力を保っている。1969年の総選挙直後にマレー人と華人との間で「五・一三事件」と呼ばれる流血衝突事件が起こると、政府は「ブミプトラ」(土地の子

の意)と呼ばれるマレー系住民を優遇する「ブミプトラ政策」を一層推進するようになり、1971年には、新経済政策 (NEP) が施行された。こうしたブミプトラ政策は、マレーシア華人のアイデンティティに大きな影響を与えたのである。

Tan Liok Eeは、1962年に公立中等学校での華語 (中国語) 教育が禁じられた後に誕生した私立の独立華語学校 (ICS) への登録者数を取り上げ、1960年代には減少する一方であった登録者数が、1970年代になると増加に転じたことに注目する (1970年--15900人、1982年--36200人)。そして、その原因を、NEPのほか、英語教育をマレー語教育に改めマレー語を唯一の教育言語とした政府のブミプトラ政策に求める。こうしたブミプトラ政策の結果、入学・就職に割り当て制が敷かれると、公立学校で良い成績をおさめることの意義が薄れ、また、華人のChineseとしての意識を高めたのである。その結果、登録者数の増加に見られるように、ICSへの華人の関心が高まり、寄付金が集まり、学校の施設は改善された。中等学校レベルの教科書が全教科作成され、統一の試験も行われるようになった。統一試験は、海外の大学に入学する際に用いられるようになり、ICSを卒業した後に高等教育を受けることも可能になったのである。こうしたICSの充実が、ICSに対する華人の関心をさらに高め、それはまた、華語への関心や華人のChineseとしてのアイデンティティを高める結果にもなったのである。1983年の調査によると、ICSの生徒の多くが、華語による授業に賛意を示し、政府の試験がなお重要な位置を占めているものの、統一試験の方を重視する生徒が過半数にのぼっている。私立学校でありながら、生徒の多くが中流階級以下の出身であることも、興味深い。

Tan Chee-Bengは、中国志向の程度によってマレーシア華人を三つに分類した1970年代のWangの議論を批判し、マレーシア華人を「中国への忠誠や志向にしたがって分類することは、もはや意味をもたない」 (本書p.149) として、マレー文化に対する姿勢によって、マレーシア華人を三つのグループに分類し直す。すなわち、一方の極に、中国語や中国文化をかたくなに守ろうとするグループAを置き、もう一方の極には、マレーシアへの統合を優先する統合主義者のグループCを置くのである。マレーシア華人の大多数は、その中間のグループBに属しているが、その態度は矛盾したものになりがちで、グループAの考え方に賛同してはいるものの、それが非現実であることを認識していて、グループCの現実的な考え方にも理解を示すが、その考え方には賛同したまらない。グループAが、実際には小さな集団であるにもかかわらず華人の間で大きな影響力をもつものに対して、グループCは影響力をもたない。その原因として、Tan Chee-Bengは、マレーシア政府のブミプトラ政策の影響を指摘する。ブミプトラ政策の結果、ブミプトラと非ブミプトラとの間の溝が深まり、華人はますます自分たちのエスニシティを強調して結束するようになり、

「Chineseの統合のためにマンダリン（標準華語）を話そう」（本書p.143）というキャンペーンがなされるようになり、グループAの人々は、華人の利益を守る「民族英雄（minzu yingxiong）」と見られるようになっていったのである。このような状況では、グループA内の強硬派が正当化され、グループBから、そしてグループCからも支持を得るようになる。

現在のマレーシア華人は、マレーシアでの生活経験を共有している以上、「マレーシア化（Malaysianization）」（本書p.156～157）することは避けられない。こうした変化のことを言うのに、Tan Chee-Bengは、「文化変容（acculturation）」という言葉を用い、Chineseとしてのアイデンティティの消失に結び付ける同化主義者を非難する。そして、異なるエスニック＝グループの人々が、一つの国家の国民として統合され、共通の国民アイデンティティを共有する「国民統合」を主張するのである。このために、Tan Chee-Bengは、マレーシアの国民統合のためには欠かせないものとしてグループCの立場を支持し、グループAの立場を正当化しグループCを弱体化させる結果に終わっているマレーシア政府のプンプラ政策を非難し、また、マレーシア華人には、華人の利益だけに関心をもつのではなく、マレーシアの民主的システムと正義とを守り維持することに積極的に参加することを、呼びかけるのである。

しかしながら、国民国家の意義が相対化され、マレーシアの国民統合の意義が問題にされ始めている昨今の状況下において、中国志向を意識的に無視し、単に「文化変容」という言葉を用いて「マレーシアの国民統合」の名の下にグループCの立場を支持することによって、問題は解決するのであろうか。グループA・Cという両極端を並立させその一方だけを取り上げることによって、大多数がグループBに属するマレーシア華人を理解することは、果たして可能なのであろうか。

Tan Chee-Bengは、論文の序章と終章とにおいて、華人アイデンティティの三つの主な構成要素として、「ラベル、アイデンティフィケーションの客観的側面（言語・習慣等）、こうしたアイデンティフィケーションの主観的経験」（本書p.140）を挙げ、その三つの成分全てに注意を払って華人のアイデンティティを捉える必要性を強調しているのであるが、Tan Chee-Bengのこうした意図は、自らのマレーシア華人のアイデンティティの分析において、ほとんど反映されていないと言わざるをえないのである。

### 3. おわりに

本稿で取り上げたのは6本の論文だけで、それは、本書全体の一部でしかない。本書には、それ以外にも、インドネシアについての論文など、魅力的な論文が多数収められている。しかし、本書のもつ特徴や魅力は、ここで取り上げた6本の論文から十分伺い知ることができよう。

その一つとして、東南アジア華人のアイデンティティの多様な側面が本書で明らかにされていることが、挙げられる。例えば、かつての中国志向から現地国志向へと華人は変わっていった、というように直線的に華人のアイデンティティの変遷を捉えることは、可能なのであろうか。それが不可能であることは、先に取り上げた論文で明らかにされる。すなわち、SeeとWickbergの論文によって、中国志向がなくなったわけではないことが示され、さらに、Tan Liok EeとTan Chee-Bengの論文では、華人の中国志向が現地国の政策によって逆に強まりさえするものであることが、明らかにされるのである。しかし、逆に、華人が中国ばかりを志向して居住している現地社会に溶けこもうとしない、と主張しても、それはAntonio S. Tanの論文等によって完全に否定されてしまう。結局、華人の中国志向と現地国志向とが、直線的に並んでいたり、別個に併存していたりするのではなく、絶えず相互作用・相互転換しあう関係にあることを、認めざるをえないのである。

このように、東南アジア華人のアイデンティティの多様な側面は本書の諸論文で明らかにされているのであるが、しかしながら、本書に問題点がないわけではない。その一つとして、序文やWangの総論で示された華人のアイデンティティを多動的に捉えようとする本書の意図が、各論において十分に反映されているのだろうか、という問題を挙げることができる。

Antonio S. Tanは、フィリピン華人の第一世代が中国志向、第三世代がフィリピン志向としており、Seeは、中国生まれでマニラ在住の華人を中国志向の中心に位置付け、フィリピン生まれで地方在住の華人をフィリピン志向の中心に位置付けている。また、Tan Chee-BengがグループA・Cという両極端を並列させたことは、先に述べたとおりである。しかしながら、第一世代の華人や中国生まれでマニラ在住の華人が、一様に中国だけを志向し、また、第三世代の華人やフィリピン生まれで地方在住の華人が、一様にフィリピンだけを志向していると言い切ることが、果たして可能なのであろうか。例えば、第三世代でかつフィリピン生まれで地方在住の華人がいるとすると、その華人は、ある次元ではフィリピンを志向し、またある次元では中国を志向し、別の次元ではそれ以外を志向する、と

いうことが、十分考えられるのである。こうした様々な志向が重層に折り重なっている点を捉えることによって初めて、華人のアイデンティティを多元的に捉えることが可能になるのではないだろうか。こうした捉え方は、Wang Gungwuをはじめとする各執筆者によって意図されているが、各論文がそれを十分には反映していないと言わざるをえない。華人アイデンティティを多元的に捉えようとする本書の意図を具体的な研究に反映させていくことが、今後の課題として挙げることができるであろう。

一つ一つの論文を見ると、華人アイデンティティの多元性は十分に示されているとは言えないが、本書は論文集であり、様々な論文を集めることによって、華人アイデンティティの多様な側面が明らかにされ、多元性に関する各論文の不十分さが補われている。華人アイデンティティの研究は、研究する対象や研究者の考え方によって様々であり、本書は31人の研究者によって執筆されているので、本書から、華人アイデンティティの31の側面を知ることができる、とも言えよう。それは、言い方をかえれば、まとまりのなさであるのかもしれないが、論文集である本書の大きな特徴であり、本書の魅力でもある。そして、華人アイデンティティ研究の原石として、私たちに多くのことを示唆するのである。

その例の一つとして、東南アジア華人と「中華ナショナリズム」との関係を挙げることができる。自らのホームランドとして東南アジアの現地国を志向している華人が、さらに中国をも志向し、その中国志向が「中華ナショナリズム」と結び付いたらどうなるであろうか。この場合、現地国志向が失われなかったら、それは、ホームランド志向と一致しない全く新しいナショナリズムの出現として捉えることが可能なのである。そしてまた、こうした新しいナショナリズムの出現を可能とするものとして、「中国」を捉えていくことができるかもしれない。

華人アイデンティティの多様性について考慮することは、中国国外に住む中国系住民のことを「華人」と呼ぶか「華僑」と呼ぶかという議論を考える上でも欠かせない。注1で述べたような理由で、本稿では「華人」という言葉を用いたのであるが、「華僑」から「華人」へと単に言い方を変えれば良いというわけではないことは、東南アジア華人は多様な側面をもっており、先に述べたように、中国志向から現地国志向へというように直線的に華人のアイデンティティの変遷を捉えることが不可能であるということを考えれば、明らかである。中国系住民は、今なお「華僑」であるという要素を完全に失ったわけではなく、「華人」であると同時に、中国を志向する「華僑」でもあるのである。「華人」と呼ぶことによって、問題が全て解決するわけではなく、逆に、そのことによって、居住国に根差している（根差すべきである）と決めてかかることになってしまったり、「華僑」

問題が解決済みであるという免罪符を与えることになってしまったりするという新たな問題が生じる恐れさえあるのである。

東南アジアの華人に対する関心は、これからますます高まっていくことが予想される。東南アジア華人に関する出版物も、さらに増えていくであろう。しかし、東南アジア華人について理解し、その多様性・重層性というダイナミズムに注目することが、一番大切であることに、変わりはない。偏見やステレオタイプでもって、華人を決めてかかっているわけではない。本書で繰り返し述べられているように、華人のアイデンティティは、多元的で常に生成され変化しているのである。本書の趣旨を受け継ぎさらに発展させる形で、東南アジア華人に対する社会学的研究を進め、柔軟な理解を深めていき、さらに、それをもとにして、現在世界中を揺るがしている国民国家や民族に関する様々な問題を考察し、国家論・民族論について論じていくことが、今後一層求められるであろう。

#### 注

- (注1) 東南アジアに住む中国系の人々のことを指すのに、本稿では、「華僑」ではなく、「華人」という言葉を用いる。というのも、「僑」という字が「借り住まい」を意味するので、居住国に根差した中国系住民のことを、いつまでも「海外に借り住まいする中国人」という意味の「華人」と呼びつづけるのはおかしい、という考えが、現在一般的になりつつあるからである。
- (注2) 「アイデンティティ」には、大きく分けて、自分自身をアイデンティファイする「自己アイデンティティ」という意味と、他者をアイデンティファイするという意味との二種類が考えられるが、本稿では、ここで述べているように、本書にしたがって、「自己アイデンティティ」という意味で「アイデンティティ」という言葉を用いる。

#### 引用文献

- Cushman, Jennifer and Wang Gungwu (eds.) 1988, *Changing Identities of the Southeast Asian Chinese since World War II* (Hong Kong University Press)
- 廖赤陽 1993、「フィリピン左派愛国華僑組織の変容——フィリピン華僑・華人の国家アイデンティティに関する歴史的考察——」原不二夫編「東南アジア華僑と中国——中国帰属意識から華人意識へ——」(アジア経済研究所)

(なべくら さとし・修士課程)